●地域医療連携のためのコミュニケーション・ペーパー●

Network

広島共立病院広報誌
ネットワーク
新年号
2010 Winter
No.14

広島共立病院の地域医療における役割

広島共立病院　院長　村田 裕彦

あけましておめでとうございます。

昨年広島共立病院は、４月からDPC対象病院となり、急性期病院として新たな一歩を踏み出しました。また６月には、メディカルフィットネス事業を開始し、保健予防の分野で機能が向上しました。そして今年は、新病院建設に向けて様々な取り組みを始めます。

広島共立病院の入院患者の入院経路は、紹介入院（45%）と緊急入院（34%）で約８割を占めています（図１）。地域医療機関との連携と急性疾患への対応は当院の設立当初から取り組んでいるテーマであり、現在の当院もこれらで成り立っていることを示しています。

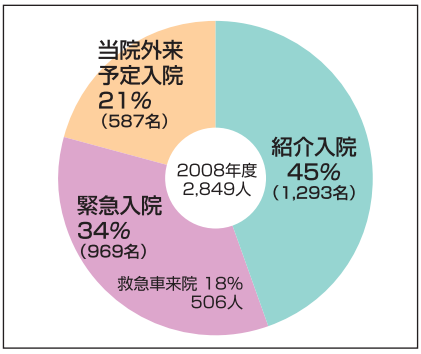

図１　広島共立病院入院経路

救急車は、医師体制の困難さから受け入れ機関が減少する中、年間1200台レベルを維持しています（図２）。安佐医師会で検討されている「安佐地区二次救急医療輪番制」が開始されれば、積極的に参画し、地域の救急医療ネットワークの一員としても頑張ります。

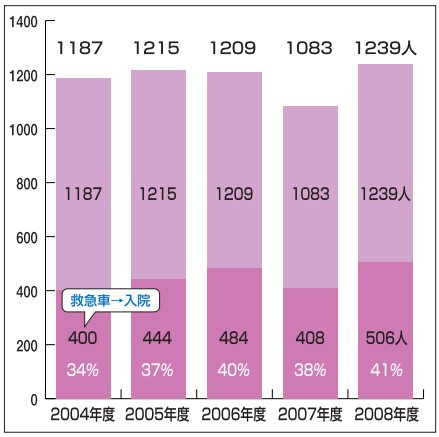

図２　広島共立病院年度別救急車受入患者数

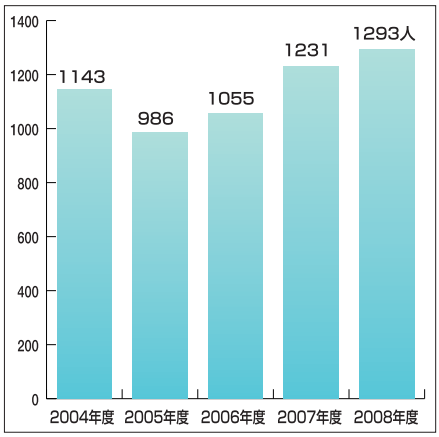

図３　広島共立病院年度別紹介入院患者数

一方、紹介入院も過去４年間は、年々増加しています（図３）。満床の場合はご迷惑をおかけしておりますが、2009年度上半期は、679名の方をお受け致しました。今後も紹介入院にお応えできるように努力致します。

地域の医療機関との連携は、診療所とは日常的に連携し合える「循環型連携」を進め、高齢者や障害者の医療は地域全体で患者を支える「在宅支援型連携」の一員として、連携力を強めて地域医療に貢献したいと考えております（図４）。

皆様、本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

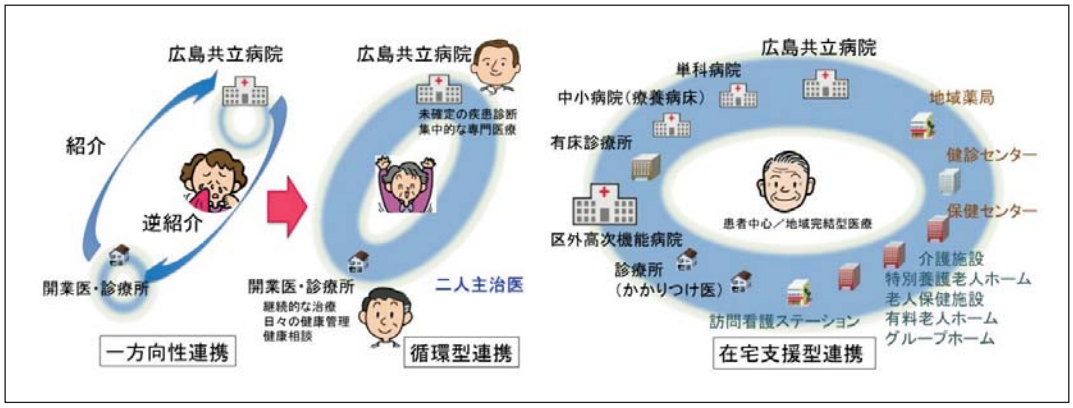

図４　地域医療連携パターン

いきいき健康カーニバル2009 開催！

地域の皆様の健康と広島共立病院新築移転の成功を祈念して、10月18日（日曜日）に『いきいき健康カーニバル2009』を開催いたしました。見事な秋晴れの下、2000人を超える人がステージやバザー、展示物、体験コーナーを楽しまれました。

中央舞台では、城山北中学校吹奏楽部の演奏や大町小学校吹奏楽団のステージマーチング、地域サークルの太極拳や健康体操・コーラスなど、地域で活躍されている方のステージで大いに盛り上がりました。

各ブースでは充実した取り組みが行われました。お寿司やおでん、うどんなど食べ物のブースもたくさん出店されました。体験コーナーでは、健康チェックスタンプラリーに200名の参加がありました。歯科チェックコーナーやリハビリ体験コーナーもたくさんの方が体験されました。また、今年オープンしたメディカルフィットネスにも途切れなく見学者が来場し、地域介護相談所を開放しての介護・福祉コーナーにも４組の相談がありました。子どもコーナーでは、ビュンビュンこまやペットボトル自動車、竹細工など手作りの遊びが喜ばれました。

病院新築移転への『期待』もたくさん寄せられました。『新病院に期待すること』のシール投票を実施致しました。医療・介護・福祉への期待が寄せられ、安佐南区唯一の総合的機能をもつ病院として入院・外来を充実させながらも、今後ますます必要度が増す介護や福祉面での期待も多く寄せられていることが分かりました。

広島共立病院新築移転、2012年着工を目指し、地域に根ざした取り組みを今後も行って参ります。

いきいき健康カーニバル実行委員会
事務局　岡野 克吉

職場紹介 第2回　広島共立病院　薬剤科

薬剤科では５名の薬剤師が業務を行っています。主な業務に調剤、高カロリー輸液の無菌的混注、抗がん剤の無菌的混注、薬剤管理指導があります。

調剤時には処方内容の、投与量、投与方法、併用注意薬、配合変化などをチェックし、調剤を行います。その後、別の薬剤師がその調剤された薬を再度チェックし数量と薬剤間違えがないかを監査します。

注射は、高カロリー輸液の混注をクリーンベンチ（無菌的に薬剤を混注する機具）を用いて行っています。抗がん剤は、院内でプロトコル※を決めているのでそれを用いて投与量の確認をします。前投薬を看護師と確認し、その後、安全キャビネットを用いて混注を行います。そして、調整済みの抗がん剤を外来や病棟に持っていった時に看護師と再度確認をします。これらも患者様に施行するまでに安全対策上、複数の目で確認を行うようにしています。

クリーンベンチでの薬剤の混注

薬剤管理指導では、入院患者様の薬はすべて薬剤科で管理しています。自分で管理出来ない方の薬は１日分ずつ、薬を薬剤科から病棟へ払い出し、看護師が配薬します。自分で管理できる方は、病棟担当薬剤師がベッドサイドに行き、薬効、服用方法、副作用などについて説明を行います。

調剤業務

持参薬についても管理をしています。入院時に持ってこられた薬の鑑別を行い、服用継続の場合、その内容をカルテに記載します。服用方法が分からないようなときは処方された施設や調剤した薬局に確認をしています。持参薬は原則すべて使用します。

医師は治療に必要な薬を処方しますので、私たち薬剤師はその薬剤をきちんと服用して頂くために、分包や粉砕又は剤型変更を行ったりします。また他科受診で薬が重複していないか、副作用が起きていないかの確認も行います。

私たちが意識していることは患者様に感謝していただけるような接し方です。患者様の希望を聞き、私たちに出来ることは最大限協力します。

以前は、薬剤師は薬局内で調剤をするだけのイメージで、顔が見えない存在でした。今は以前よりも薬剤師の存在が知られ、薬剤師の顔が見えるようになってきていると思います。これからも、「薬剤師がいてくれてよかった」「薬のことは薬剤師に任せればよい」と言ってもらえる、頼られる薬剤師になれるよう、日々努力をしていきます。

薬剤科　津島 景子

服薬指導

※プロトコル＝治療計画に沿って薬剤の与薬法、与薬量、与薬期間など決められた手順のこと

医療機器紹介［第1回］

心肺運動負荷試験（Cardiopulmonary Exercise Test:CPX）について

当院では2009年５月から呼気ガス分析を併用した「心肺運動負荷試験（Cardiopulmonary Exercise Test：CPX）」を導入しています。この検査を行うことで運動中の心ポンプ機能や呼吸機能、末梢のエネルギー代謝を調べ、特に最高酸素摂取量（peak VO2）や嫌気性代謝閾値 anaerobic threshold（AT）を総合的運動耐容能指標として測定することができます。これらの指標は今までは競技者の持久力測定やトレーニングに利用されていましたが、現在は、心不全や虚血性心疾患をもつ患者様の運動療法やリハビリテーションの際の運動処方作成などに利用されています。当院では心臓リハビリテーションやメディカルフィットネスを行う方にこの検査を積極的に行い、安全な運動療法ができるよう心がけています。

メタボリックシンドローム等で適切な運動処方が必要な方、リスクがあって運動することに自信のない方は是非一度「心肺運動負荷試験（CPX）」を受けてみて下さい。

循環器内科　鷹屋 直